

いも類と俳句 3

サツマイモ「藪は地中にあり」

編集部

・蔓引けば藪の手応へ地中にあり

白山晴好

サツマイモは、俳句的には甘藷、薩摩芋の語彙を当て、秋の季語である。また揚句のようにその塊根には藪をあてる。今ではサツマイモは地中から掘り出すものとの常識があるが、必ずしもそうでなかった時代があった。その一つは、17世紀初頭の長崎におけるものである。異国から導入された当初は、蔓性で葉が朝顔に似ていることから、サツマイモ塊根を鉢植し、棚仕立てで栽培。蔓に花が咲き、藪が実のようにぶら下がるのを待ったとの笑い話である。その二は、18世紀初期、八代将軍徳川吉宗に係わる。享保12年（1727）榎立村名主良右衛門は、吉宗から八丈島に送られたサツマイモ種藪を畑に埋め、蔓が伸びたので竹垣を立てて絡ませたが、花も咲かず枯れた。これを見た良右衛門は、腹を立てて蔓を引き抜くと、地中から藪が数本出てきたとの話である。青木昆陽の吉宗への「甘藷考」上書が享保19年（1734）であり、その頃からは「藪は地中にあり」は全国的な常識となったと考えられる。しかし、家庭菜園などで初めてサツマイモを栽培した人にとっては、300年前と同様の感動「藪は地中にあり」が共感出来たのであろう。作者の感動が伝わってくる良句である。

編集後記

サツマイモとジャガイモからのでん粉生産は、かつては花形産業の一つであり、その生産団体が志し、いも類振興会が結成されたと聞き及んでいます。しかし今や、その昔日の面影はなく、特にサツマイモのでん粉生産は文化遺産的状态にあります。本号の特集では、再生の道はないか、回復の道はないかと碩学の士に汗をかいて頂きました。執筆者各位の真摯な対応に頭を下げるのみです。その結果ですが、即効薬や特効薬はないようですが、攻めるべき幾筋かの道標は示されたようです。今後における関係者の努力やご鞭撻に期待します。

本号から西尾敏彦氏の「いもの技術誌」が連掲され、第1回は「紅赤」です。肩の凝らない記事としての「台湾番薯伝入紀」などとともに楽しみ下さい。

図表や写真がカラーで見られる電子版用意しましたので、ご利用下さい。

97号： http://www.geocities.jp/i_taru2002/jspq_no.97.pdf

96号： http://www.geocities.jp/i_taru2002/jspq_no.96.pdf

いも類振興情報 第97号 発行 財団法人 いも類振興会

平成20年10月15日発行

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303号

TEL03-3588-1040 FAX 03-3588-1225 E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp

振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社